

るための胴木や拳大の礫を多く含んだ盛土（Ⅶ層）をおこない、堤本体を構築しながら（Ⅴ・Ⅵ層）、石垣の設置や裏込め（Ⅳ層）もほぼ同時におこなっていることがわかる。これらのことから、A地点では幕末期に築堤された状況が残存している可能性が高いと考えられる。

**B地点** 掘削範囲の中央よりやや東側（山側）で、ちょうど2号濠と3号濠のあいだに設けられた渡土堤の延長線上に位置する。確認された土層はA地点と同様のようにもみえるが、状況は盛土の様相などが異なっている。

この地点では、石垣が少なくとも1回は崩落したようで、その際の盛土（Ⅱ・Ⅲ層）と、築堤時のものと思われる盛土（Ⅳ～Ⅸ層）に区別できる。また、石垣の直下にみられる胴木もA地点でみられたものとは直径がおおきく異なり、礫が多く混じる土層（A地点のⅦ層に相当する土層）も確認できない。このことから幕末期の築堤後に石垣が積みなおされていると判断される。

なお、B地点では築堤時のものと思われる盛土層のなかに、石垣の設置とは直接関係しない礫を多く含む土層（Ⅵ層）がみられる。この土層は奥方向（南方向）へのびていくようであり、ちょうど外堤に直交するように存在する。西方向へくだる斜面に外堤を構築する際の土留めとなるような役割をもたせるための土層だったのかもしれない。あるいは、平面的にみるとB地点は渡土堤の西側面の延長線上にあることから、渡土堤の構築とも関係があるかもしれない。Ⅳ層やⅤ層が東側から流しこまれたような様子であることも示唆的といえる。周囲の掘削時にもこのような状況を理解する手がかりがないか注意したが、確認することはできなかった。Ⅵ層が形成された直接的な理由は不明であるが、単なる土留めにせよ、渡土堤と関連があるにせよ、外堤構築時に直交方向の土層を意図的に設けて盛土をおこなっていたことは確かといえる。

**C地点** 掘削範囲のなかでもっとも東（山側）に位置する。基本的な土層は、上から表土（Ⅰ層）、盛土（Ⅲ・Ⅳ層）、地山（Ⅴ層）であった。この地点での地山上面の標高は105.5 mである。いちばん西側のA地点では地山上面の標高が101 mなので、約45 mの調査区のなかで地山の標高は東から西へ4.5 m下がっていることがわかる。

**まとめ** すでにのべたように今回の調査で出土した遺物はなく、正確にいうと外堤が構築された時期は不明である。しかし、文書類や胴木をもちいる石積みの状況などを勘案すれば、調査箇所における現状の外堤は幕末期以降に構築されたものであることはあきらかといえる。（加藤一郎）

## 註

- (1) 現在、この埴輪は書陵部が所蔵し、陵墓課で管理している。
- (2) 伊達宗泰「崇神陵文久古図について」『青陵』No.26、榎原考古学研究所、1974年。

なお、今回の調査と同時期に当陵の拝所北側付近の外堤において、外堤の強度を確認するボーリング調査が宮内庁京都事務所によってなされた（崇神天皇陵外堤護岸改修計画に伴う基本調査）。その所見によれば、当該箇所の外堤内には高さ約6 m、厚さ約80 cmのコンクリートの壁体が存在するようである。一般的にコンクリートの使用は明治以降と考えられるので、当陵の外堤は幕末期に構築されて以降にも大がかりな改修がなされていたようである。ただし、このような改修は今回の調査箇所では確認されていないので、部分的なものであったと考えられる。おそらく水圧がもっともかかる前方部前面側の外堤を主としてなされたものではなからうか。このような工事がいつなされたのかについては、現在、公文書を精査中である。

## 附 崇神天皇 山邊道勾岡上陵昭和41年採集品

すでにふれたように、以下では昭和41年に当陵で採集され、畝傍陵墓監区事務所で保管されていた埴輪1点（第20図1）を紹介する。当陵では埴輪が存在することは確認されているものの、その数は少ないため、1点であるがここであらたに紹介しておくことも学界に有益であると考えられる。

第20図1に示したものがその埴輪片である。胎土はやや粗く、直径5 mm以内の白色粒や金雲母などの

花崗岩起源と思われる砂粒を多く含む。焼成は良好で、おそらく野焼きによるものと推測される。色調は暗黄橙色である。磨滅しているせいか、内外面ともにはっきりとした調整を観察することはできない。外面にはかなり突出する突帯がみられる。突帯よりも上段ではおそらく逆三角形となる透孔を確認できる。横方向の断面形状はあまり曲面をもたず扁平であり、円筒埴輪ではなく楕円筒埴輪である可能性が高い。なお、内面には「崇神天皇陵／前方部北側前部裾／濠／昭41. 10. 22/採」と注記がなされており、採集日とおおまかな採集位置がわかる。

第20図2は『出土品展示目録 埴輪Ⅲ』（48）で形象埴輪として紹介された破片であるが、重要な資料であると考えるので、ここで図示してあらためて紹介しておく。

2は円筒埴輪類（円筒埴輪、朝顔形埴輪など）の鱗部分の破片である。胎土や焼成は1とそれほど変わらない。色調は淡黄橙色である。この鱗の特徴は、円筒部本体の突帯が鱗にまで延長している点と端部に縁取りを意識したような造作がみられることである。鱗の初現である東殿塚古墳では、突帯が鱗まで延長し、鱗の外縁に粘土板を貼り付けるなどして縁取りをおこなっていたが、その縁取りがやや省略された状況がこの資料で確認できる。いわゆる斉一的な鱗付円筒埴輪にみられる鱗への移行段階として位置づけることができよう。なお、この破片には「崇神陵前方部南側裾／昭四二・一〇・二〇」と注記がなされている。（加藤一郎）

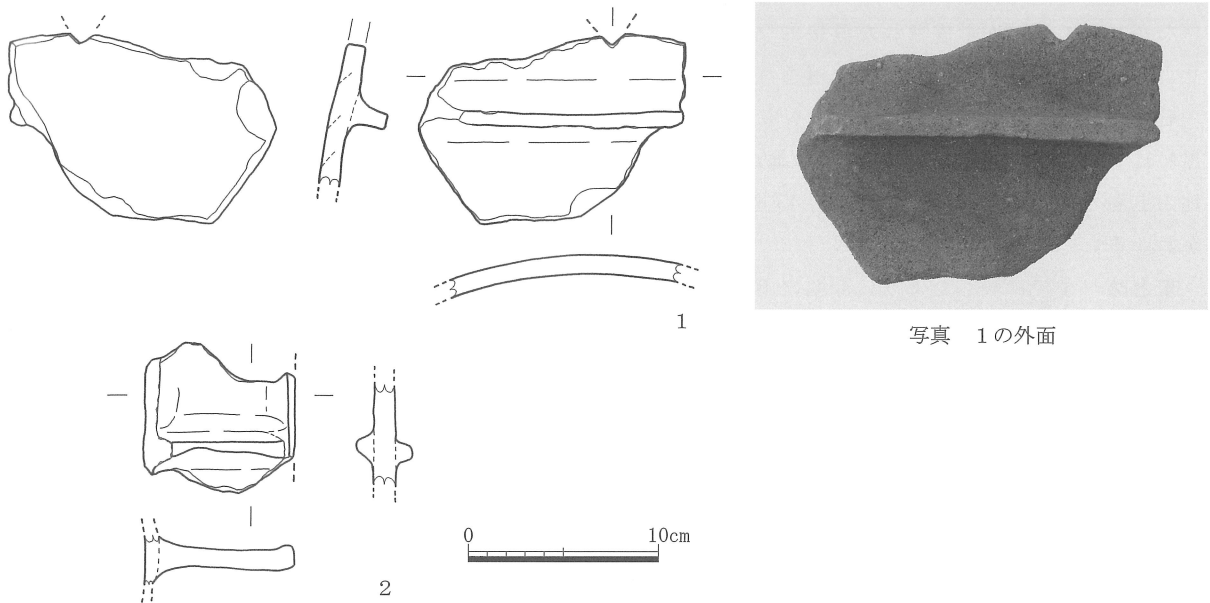


写真 1 の外面

第20図 山邊道勾岡上陵 採集品実測図（1/4）